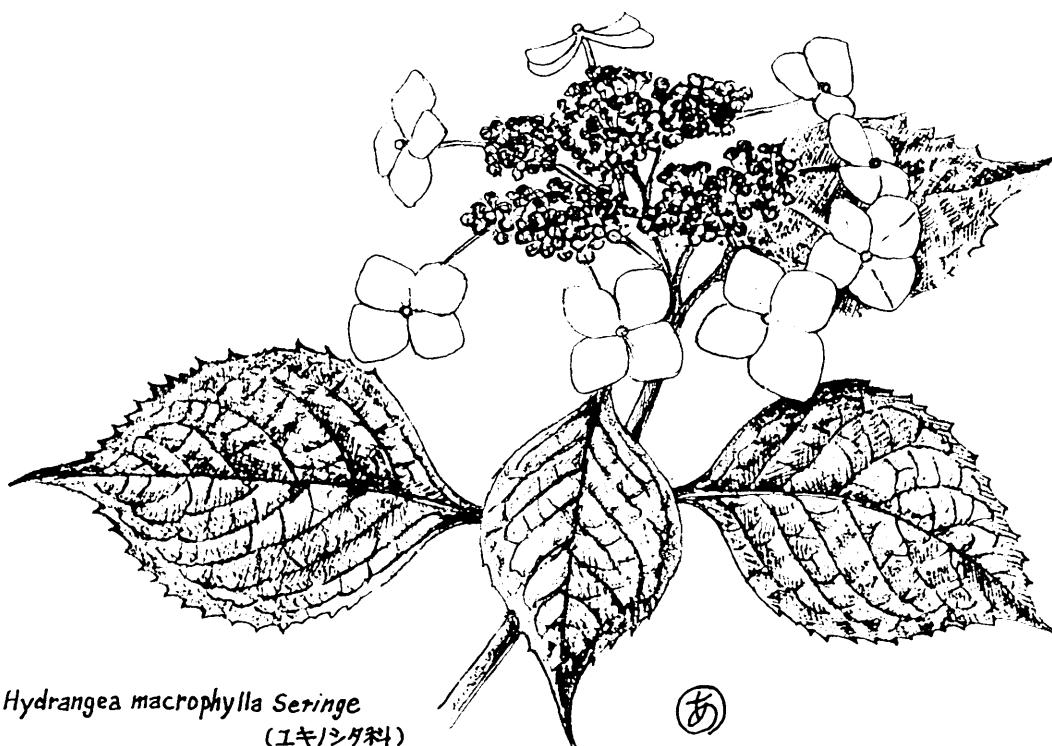


協議会ニュース

63号

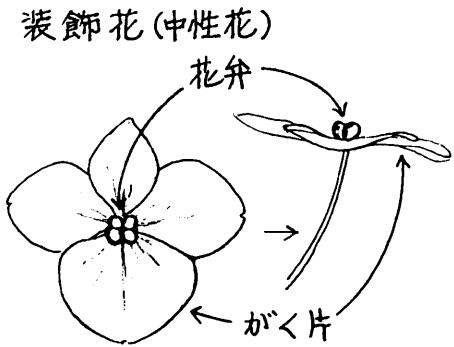
愛知県自然観察指導員連絡協議会 1997.7



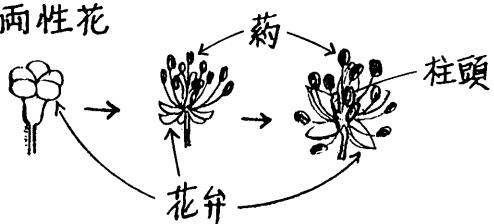
Hydrangea macrophylla Seringe
(ユキ)シタ科)

あ

〈拡大図〉――



兩性花



・観察ノートから・

カクアジサイ:両性花を拡大してみたら紫水晶の
ような3裂した柱頭と長短交互に規則正しく
並んだ雄しべの美しさに驚いた。(カ-5.)

〔話題の地見学会結果〕

東濃地方のシデコブシ

事務局

「話題の地見学会」の第2回目として、4月12日に東濃地方のシデコブシ自生地を見てきました。レッドデータブックで絶滅危惧種となっているシデコブシは、全国的には東海地方の一部にしかない植物ですが、地元では各所に見られるもので、その保存策はどうしても後手になります。そうしたことについて考えてみたいと思い計画したものです。見学地は愛知県の方がよかったです。普段あまり見ていない東濃地方を対象としてみたものです。シデコブシも丁度満開の時期で、総勢6人で多治見市から土岐市・瑞浪市の自生地4カ所を回りました。

その概要とシデコブシの保護について次にまとめてみました。内容については私を見えたもので、皆様のご意見をお待ちしています。また、地元で「みどりの会」を作り活躍している野村さんらも寄稿いただきました。

本 本 本 本 本

1 見学地の概要

〔瑞浪市日吉町〕

鬼岩公園の松原湖の東側にある自生地で、谷筋にアカマツなどとともにシデコブシがまとまって自生しています。ハナノキも相当あるという貴重な場所ですが、一帯は別荘地として開発される所で、既に土地も分譲されているようです。別荘地となつてもシデコブシだけは残そうとしているような感じも見受けられましたが、他の樹木の間で窮屈そうに生えているシデコブシがどのようになっていくか、心配な場所でした。

〔瑞浪市大湫町〕

中山道の宿場町である大湫の南西にある自生地で、初め林道のそばの谷に10数本ある場

所かと思ったのが、林道周辺を歩いているうちに、降幡さんがかつて来たことがある場所を見つけました。小さな湿地の周辺に、背の低いシデコブシがまとまって自生しており、土岐市泉町のシデコブシに近い生育環境でした。周辺の山地にも点在しているようで、シデコブシは昔からこののような形で自生していたと思わせるような地域でした。

〔土岐市泉町〕

土岐市の美濃焼団地の近くにある自生地で、市が天然記念物に指定して保護しているようです。明るい湿地の中に背の低いシデコブシがたくさんの花をつけていました。シデコブシの数が多く、湿地としても良好なものを感じられました。周辺の谷にも幾つかの自生地があるようです。

〔多治見市小名田町〕

町名ははっきりしませんが、虎渓山の北に位置する自生地で、県道から入った一角の谷間にシデコブシが小面積にまとまって生えている場所がありました。周囲は常緑樹の多い林で、シデコブシは花も全く見られず、勢いがないように見受けられました。

2 シデコブシとは

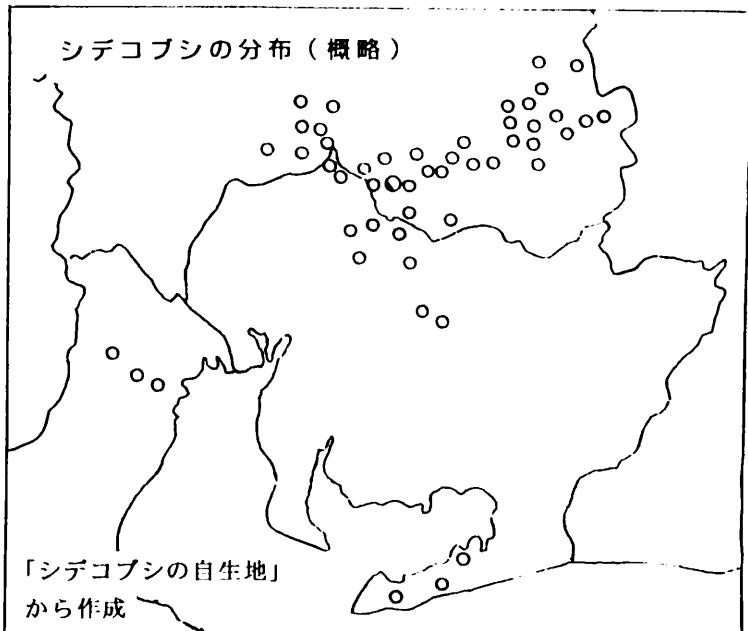
シデコブシは、コブシやタムシバと同じモクレン科、モクレン属の植物で、コブシに比べて、花弁が長くたくさんあるのが特徴です。幹は白っぽく、根元から何本も分かれて出ることが多く、場所に応じて5m位の低い灌木であったり、時に高木にもなります。湧水のある谷間



や湿地に自生しています。

シデコブシを含むコブシの仲間は、雄しべの中に雌しべも数多くあり、葉の変化した形を残していることで、原始的な植物と言われています。コブシの仲間は、日本に4種（コブシ・シデコブシ・タムシバ・コブシモドキ）、中国に1種分布しており、そのうちシデコブシは右図のように伊勢湾を開むように愛知県・岐阜県・三重県にのみ分布している特異な植物です。

早春を彩る美しい花というだけでなく、進化の上からも、分布の上からも貴重なものです。



3 シデコブシの保護

シデコブシやハナノキなど、全国的に見れば非常に貴重であっても、地元ではある程度まとまって分布する植物の保護は、意外に困難なものです。分布の限界地などではその場所をどうしても守らねばならないでしょうが、ある程度広範囲にあるものはどれをどのように守るか、幾らかは無くなってしまってよいのか判断しにくいものです。

いずれにせよ大切なことは、守るべき対象は個々のシデコブシではなく、他の植物や環境を含めたシデコブシの自生地として守っていかねばならないことです。

① 里山の保護

シデコブシの保護のために最も望ましい形はシデコブシの自生地を含めて、地域の二次林全体を保全することでしょう。シデコブシは、この地方の里山の自然の一部として古くから自生していたものです。従って、貴重だからということ以前に、郷土の自然を構成する植物の一つとして、郷土の里山とともに残していくのが最も良い形なのです。里山の自

然を守る中で、自ずと貴重なシデコブシ等の植物も保護されるのが望ましい形です。そうすることで、シデコブシの保全に必要な水系なども守ることができます。

地域の自然を守るということは、貴重なものを点的に残すのではなく、面的に多様な自然を保全していくことであり、それが今後めざすべき方向と思えます貴重だからというだけでなく、ありふれたものでも残すということが今後の課題なのです。

② 体系的な保護を図る

多くのシデコブシ自生地のすべてを残すことは困難だとすると、少なくともどの位の自生地を残したらよいかを考えて置く必要があるような気がします。現在の分布の限界地や良好な自生地は勿論ですが、全体の自生地の植生調査等を行って、各自生地の特徴や存在意義を明らかにし、植生上、立地上特徴ある自生地とか個体変異、生育に特徴を有するシデコブシの自生地は特に保護していく必要があります。

こうしたシデコブシの分布や生態上特徴ある場所については、行政に働きかけて、こここの場所は数ある自生地の中でもこうした意味



があるとして、天然記念物や自然環境保全地域などの指定を受けたり、公有地化していくことが大切なようと思います。

しかし、このような調査をすることは、云うは易くとも実施は困難なことで、多くの人の地道な協力がなければできないものです。シデコブシの保護のためには、各地域や各県の状況としてではなく、広域的な視点で全体の状況も見ていく必要があります。

なお、自生地にこうしたランク付けをすることとは、ランクの低い自生地に開発の理由を与えるという問題はあります。前に述べたように、地域の自然全体の中でシデコブシも保護されるのが理想的ですが、世論がそうした機運にまで熟していない以上、当面は保護の必要性の高いものから対策を講ずることも止むを得ないかもしれません。しかし、ランクの低いものであっても、開発を少しでも遅らせる努力がシデコブシのような局地的に分布する植物の保護には大切なことです。

③ 自生地の管理について

シデコブシは明るい湿った場所に生育する植物で、その場所が遷移により常緑樹等が増加したり、乾燥化することになれば、シデコ

ブシの生育に影響してきます。シデコブシの自生地を守るためにには一般の湿地の保全と同様に、現在の生育環境を維持することも必要なことです。そのためには継続的な調査により、その場所の変化を把握して、必要により常緑樹の間伐等を慎重に実施する必要があります。

自然をそのまま保全すれば、子孫に伝えられるという程単純ではないようです。二次林のような場所では、現在の自然が成立した背景が変わってくれば、自然の内容も自ずと変化していくはずです。現状を維持するためには、そのための管理も止むを得ないことです。なお、管理に際しては、シデコブシを守るのではなく、生育環境を維持するという基本を忘れないようにすることが大切です。

④ 種としての保護

野村さんも指摘しているように、シデコブシはその自生地によって多少の変化があるようで、地域の形質を大切にすることも必要です。コブシや園芸種のヒメコブシなどを近付けるよう配慮する必要があります。自然にタムシバなどと交配してしまうのは止むを得ないかもしれません、人為的にシデコブシが変わってしまうのは避けなければなりません。コモウセンゴケがトウカイコモウセンゴケとなったようなことがシデコブシにも起こり得るかもしれません。

(事務局：佐藤)

~~~~~

## シデコブシの見学会に参加して

篠田陽作（名古屋支部）

最初に見学したのは、瑞浪市の日吉町にある鬼岩公園で知られている、松原湖の東側に位置する所で、南からやや南西に向かう谷筋の上流部が湿地で、そこから流れ出る沢に沿ってハナノキ、シデコブシの点在する場所です。谷が狭く、その底にシデコブシがマツや他の常緑樹に光を遮られながら、細い幹

で背伸びをするように育っている為に自分の体を支えられずに倒れているものも多く目にされます。間伐が必要な状態です。既に間伐の為にシデコブシに日印のテープが巻かれていました。そんな状態ですから花の数も少なく、花の色も冴えませんでした。やはり、シデコブシは日当たりの確保が、保護していくためには必要な条件の一つかと思われます。

次に訪れたのは、土岐市の泉町久尻にある二つの谷に分かれている、小さいほうの谷の

シデコブシです。ここはやはり南西斜面に広がる湿地ですが、日吉町の谷とは形状が違い浅い鍋底のような、谷とは呼べないほど日当たりの良い湿地です。そのせいか枯れたヌマガヤの間には星をちりばめたように、鮮やかな色のハルリンドウが群生していて、参加者から思わず歎声が上がるほどでした。当然シデコブシは背が低く2~3mほどですが、花を沢山つけています。そして、花の色も鮮やかです。日吉町で見たシデコブシとこのシデコブシが同じ植物とは思えないほどの違いです。植物が置かれた環境によって、こんなにも違う姿を見せる物なのだと、しばし感心して眺めていました。これらの貴重な植物がいつまでこの姿を保つことが出来るのか、それはひとえにこれから私たちの自然に対する考え方と、自然との付き合い方にかかっていると思います。

現代人の自然に対する考え方には自然そのものの必要性を認めない人とか、自然の必要性を認めてもそれは自分にとって都合のよい

自然であったりして、自然そのままを受け入れる人はほとんどいません。本当の自然とその必要性と、自然と共に暮すライフスタイルを今一度問い合わせではないでしょうか。シデコブシを見ながらそんなことを考えてしまいました。

当日は、ペーハーセンサーを持って行かなかったので、両方の水のPHを計測できませんでしたが、日吉町の沢の方が酸性度が低く、泉町の湿地の方が高いのは植生からも容易に判断できました。そのため泉町の湿地にはほとんど他の樹木ではなく、ツゲとシデコブシの独占状態でした。このことからも、シデコブシが酸性の土壌にも強く、湿地に生育しているのが納得出来ますが、やはり湿地に生育するシデコブシは大木にはならず背丈の低いものが目立ちました。自然界の生存競争も厳しいものがあるようと思われます。

午後からも見学会は多治見方面に行くようでしたが、私は午後の会議のため残念ながら2箇所のみで名古屋へ帰りました。

### …【寄稿】…

## シデコブシについて

野村勝重（多治見市）

### 観察結果

シデコブシは、12弁から18弁と図鑑で解説しております。多治見市での観察結果では、最高40弁のシデコブシがありました。97年4月6日に瀬戸市の「海上の森」では10弁のシデコブシを確認しました。シデコブシは毎年同じ数の花弁を付けるということでも無いようです。

純白に近いシデコブシの隣に、濃いピンクのシデコブシが仲良く並んでおります。地味の違いが色を分ける、と云う説も違うようです。

幸運にもシデコブシの周りには、貴重な植物群が生育しております。他の植物には無い興味をそそる貴重な植物がシデコブシです。

### 異常事態

東濃地方の多くのシデコブシ自生地周辺にはタムシバが自生しております。明らかにシデコブシとタムシバとの自然交配と思われる珍妙な樹木が存在しております。葉は明らかなタムシバの葉を持っております。しかし、花はどう見てもシデコブシという樹木です。これに学名を付け、国際的に認知して戴こうか、という議論が「日本シデコブシを守る会」でされた事があります。どうやらその議論は頓挫してしまったようです。

1996年はシデコブシに限らず、花に恵まれませんでした。94年・95年の夏の水不足、日照りが影響しての事とまことしやかに語られました反面、シデコブシは10数年に一度はこ

のような年があるとも云われております。ともあれ、花の付きは良くありませんでした。

97年も異常事態です。全体的に花期が早くなっているようです。岡鑑記載の開花時に花を観察しようとしても、些か無理があるようです。おおよそ、我々人間に比べ、植物は行儀良く規則正しく生きているようです。ご機嫌を損ねたのか、今年は規律に乱れがあったようです。

例年ですと、シデコブシの花が終わる頃にタムシバの花が咲きます。今年はシデコブシの花が散らないうちに、タムシバが花を付けました。先に述べましたシデコブシとタムシバの自然交配は、今年のような変則的な年に発生するものと推測できそうです。それらを正確に計測すれば、変則年のサイクルが浮かんでくるものと思われます。

### シデコブシの立場

現在知られているシデコブシの自生地は、「日本シデコブシを守る会」発行の「シデコブシの自生地」を読んで戴きたいと思います。なお、この本は全ての自生地を網羅したものではありません。完全調査の力量がありませんでした。意識的に記載しなかった自生地もあります。その本をご覧戴ければ、シデコブシの自生の中心が岐阜県東濃地方にあることは明確です。そこにシデコブシの大きな不幸が存在します。

岐阜県政全体の中で、東濃地方の扱われ方はあまりにもヒドイ状態です。このことが、ひいては、岐阜県の植物研究の中でも、県政と同様に扱われています。

余談ですが、多治見市の防災無線で「美濃地方に大雨警報が発令されました」とアナウンスされると、大方、雨は止みます。このことは95%の確率で当っておりまます。

観察会・調査会・研究会は、岐阜市・大垣市・奥美濃・飛騨・高山地方が中心となっております。東濃地方へ足を運ばず、東濃地方の植物標本が少ないと、嘆いてみせます。植

物研究者が腰を落ち着けて調査・研究する意思は容易に認められません。東濃地方は、シデコブシに限らず周伊勢湾要素植物の宝庫でもあります。

岡鑑で明記してあるものはありませんが、モンゴリナラもその隠れた代表格と思われます。専門家にそっぽを向かれても、民間の趣味人たちが興味に誘われて、細々と地道にそれらの植物とお付き合いしております。

そんな中、突如として「自然保護運動」絡みでシデコブシ論議が沸き起こり、岐阜県政の中で、シデコブシを見た事も無い自然保護担当者が、シデコブシを充分研究した事も無い学者の意見だけを聞いて、シデコブシ政策を打ち立て、奇妙な錦の御旗をかざしております。そこにシデコブシの大きな不運があります。願えるならば、シデコブシの自生地を充分観察・研究した上で、シデコブシ対策を考えて欲しい。シデコブシだけでなく、植物全体を考える中で、専門家としてどの範疇の人を招請するか、特に検討して戴きたいと思います。多くの場合、行政は、学者・研究者・自然観察者は素人とし、「造園業者」「園芸業者」こそ専門家、と考えている節があります。日常的な交際の密度により、それらの業者を専門家としているようです。それに、それら業者は、行政が考えた結論に符合する怪しげな方程式をつくりあげます。人は誰しも、その人にとって心地良い言葉を採用しがちです。行政という重大使命を帯びた人たちがこれではまずいと思います。はなはだ遺憾な事と云えます。

そして、プロジェクトが巨大になった時、「コンサルタント」が介在します。

先般体験した事ですが、「コンサルタント」と合同でシデコブシの調査をした時、調査員と事前の打合せをしました。打合せ事項をコ



ンサルタントが一生懸命メモをとっていました。シデコブシという名前は聞いた事があるようでしたが、残念ながらシデコブシについて図鑑記載事項ほどの知識も持っていないようでした。

コンサルタントとは、他人から依頼を受けて相談にのり、適切な助言・指導を行う人の事をさすようです。だとしたら、それなりの深い知識と複数の対策案を含め、立案・提案する能力が求められます。残念ながら。これがコンサルタントの実態のようです。しかし、不可思議な事に、そのコンサルタントの怪しげな理屈付けで行政施策の全てが決定されております。

コンサルタントと称する設計業者の実話があります。多治見市で3年毎に「国際陶磁器フェスティバル」が行われます。その専門の建物を造る事になりました。その予定地にシデコブシの自生地が選定されました。（近隣に造成された更地があります。）そこで考えついた事は、尾根から尾根を結ぶ巨大な人工地盤を造り、その上に工作物を造れば、シデコブシに手を加えずに済み、反対運動も封ずる事が出来ると云うものでした。うまい事を考えつきました。しかし、小学生でも理科で生物と太陽光のことを学び、多くの場合実験して納得しております。これが高学歴と高度な専門知識とを売り物にする「コンサルタント」のお寒い実態のようです。

余談ではありますが、政治・行政の能力不足のために、オカミ意識の故に、コンサルタントまかせになっております。政治・行政の立案・調査・意思決定にコンサルタントと称する、能力不明な業者の発案・発想が、市民・学者・研究者の意見より優先する事に、深い疑問がわいてきます。

#### シデコブシの悩み

大枠は「種」の問題としてくる事が出来ましうが、東濃地方で問題とされる代表的な事例の7項目を列記します。この事はシ

コブシに限らず、ハナノキ・ヒツバタゴについても同様な悩みです。貴重植物共通の事かもしれません。

#### 種の問題

「日本ンシデコブシを守る会」で種についての議論がありました。シデコブシの種はトータルとして考えれば良い。遺伝子レベルまで考える事は無い。このように力説する人がいます。金沢大学の植田邦彦先生は、「種」について心配をしておられます。農林省森林総合研究所の河原孝行氏がシデコブシの「遺伝子調査」をされました。肉眼的な観察でも三重・渥美・東濃では明確に微妙な違いが認められます。

植田邦彦先生や河原孝行氏の理論に従えば、シデコブシの自生地周辺に、出所不明なシデコブシを無神経に植栽する行為は、如何なものかと思わずにはおられません。暴力的な「種」の混乱を平然と見逃す事はできません。「種」について乱暴な事の実行者は行政です。

#### 接ぎ木の問題

コブシの台木にシデコブシを接ぎ木したものが氾濫しております。葉は明らかにコブシの葉で、花はシデコブシ風です。

多治見市は「市の木」にシデコブシを指定しております。この得体の知れない木を、市民の結婚祝いとして提供しておりました。最悪の引き倒し的、役所的善意の行為だと思われます。批判の末に95年4月から廃止されました。相当数の個体が市全体にばらまかれた事になります生産コストからみれば実生の苗木の方が安価だと思えます。コスト高を望む行政思考にそぐわないから、奇妙な接ぎ木が氾濫するものと思えます。

#### 移植の問題

開発行為の範囲内にシデコブシの自生地がある場合、行政から開発業者へシデコブシの移植が指導されます。シデコブシのことだけ

考るからこのような指導がなされます。

人という文字は寄り添って、助け合う状態を表意した、とよく云われます。『人は人だけ支え合うのでは無く、倒れそうな処を突っかい棒で支えられ、つまり自然環境全体に支えられている状態が人という文字だと思います。』その事が理解出来ないから、シデコブシだけを切り離し、移植を厳命します。

多治見市の例ですが、住宅団地開発業者と相談の上、開発に先行して当該地のシデコブシから実を採集し、発芽させ、育て、それを開発地周辺に戻す事に合意し、実行に移そうとしました。何故なら、実生に比べ移植は10倍以上の費用がかかります。浮いた費用で、少しでも自生地をそのまま温存したい、と願ったからです。そして開発業者も快く合意してくれました。しかし、岐阜県当局からの厳命は、「シデコブシは絶滅危急種だから移植すべし」と云うものでした。本来、我々と業者との話し合いに理があるものと思われます。

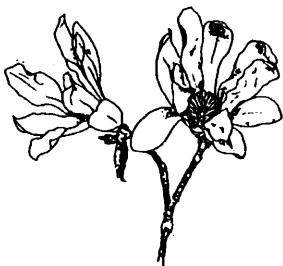
へんな学者の入れ知恵のようでした。

### 自生地周辺での植栽

多治見市での事例です。「広域総合生活環境保全林整備事業」と云う事業があります。この事業は市町村の提案を受けて、国費と県費とを駆使し、保安林指定地を最優先して、「〇〇の森」を建設する事業です。この「〇〇の森」はいわば保安林の芝生公園化事業と断言して憚らない畏るべき事業です。この事業施工地内にシデコブシ自生地があるにもかかわらず、あえてその直近地にシデコブシを植栽しました。種の混乱についての考察は、

農林省・岐阜県当局には些かもありませんでした。

行政サイドにはシデコブシの種について真剣な勉強と議論が望まれます。



### 自治体にとって厄介者

各自治体にとって、開発を優先させる事が至上命令のようです。その結果、シデコブシ自生地のような、本来開発にそぐわない土地にまで目を向け、先陣を争って開発競争を煽っているようです。

「自然保护運動」との絡みで、シデコブシがその象徴的な扱いを受けるようになりました。結果的にシデコブシは行政にとって甚だ迷惑な存在となり、対象となるシデコブシを移植する事にて、「シデコブシを守った」と云う、免罪符を得る方便に利用されがちです。

現在、各地でシデコブシの自生地の調査が進んでおります。自生地の発見（確認）の発表に好意的な自治体は皆無と云っても良いほどです。中には、「将来の開発に迷惑」と云わんばかりの自治体もあります。「現在の美酒に酔い痴れ、子孫に美酒を残さない」とするのが現在の大人の考えのようです。困った事です。

名古屋市の幹線道路沿いにどれほどの平屋の事務所があるのか。名古屋駅を中心とした半径1kmの中にどれほどの平屋の事務所があるのか。厳密に調査したいと思います。都市は云いようのないほど自然環境を無秩序に破壊し尽くしております。都市計画法がありながら、あまりに野放図な有様です。名古屋市を徹底的に合理的に再開発をすれば、もっと緑豊かな都市が構築出来ると確信しております。

それが出来ない最大の理由は、「山を崩せば良い」と云う、低レベルの発想がそうさせています。知恵のないミーハー的な指導性を大いに告発すべきと思います。

健全な都市再開発指向が定まれば、大都市周辺の地方都市の生きる道、つまり開発に対する考え方も健全なものになっていくと思います。

### 〇〇街道づくり

中津川市の例です。中津川市は、シデコブ

シの東限に当たります。その中津川市の最東端にシデコブシの自生地が有ります。その貴重な自生地の近くに「シデコブシ街道を造ろう」と云う事になりました。そして、植栽されたシデコブシは、渥美のシデコブシから採取された実から育てたものでした。なんとも亂暴な話です。同様な事が関市の「コブシ街道」についても云えそうです。

この〇〇街道は、ハナノキにも影響を与えています。岐阜県当局は、国道363号線を「ハナノキ街道」と命名しております。現にハナノキを大量に植栽しました。

ハナノキは、岐阜県の東濃地方や長野県の一部等と、アメリカのカリフォルニア州で自生しております。ハナノキの自生地が周辺にあるにもかかわらず、その「ハナノキ街道」に、東濃のハナノキとカリフォルニアとが植栽してあります。行政に質した処、早々行政的専門家「造園業者」「園芸業者」が招集され、調査を依頼しました。が、それらを判別出来る業者が2・3人しかいなかった、と云う事です。

この事は、「種」に関わる事でもあります。乙女チックな心地良い響きがする、〇〇街道構想には厳重な注意が必要と思えます。

### 不勉強な公務員

公務員はなぜなのか、2~3年のポストで変わります。結論的に云えば、極論とは思いますが、「業者と癒着する」と云う事が前提となっているから移動がある、と思われます。もちろん一部にはそのような手合が存在する事も事実と思えます。

移動があるから、現在の担当業務についても勉強する気力がわからない。必要な事は税金で「コンサルタント」を雇えば良い。言い訳まで用意してくれる。このような公務員と、喧々と議論すること自体、全く間違っています。

国家機関の公務員には、「学者」が平易な言葉で教授し続ける必要を感じます。市町村

の吏員には、「自然観察指導員」がその観察結果をもって。粘り強く、小学生の子供に教える心構えで、語り掛け続ける事が肝要な事と思います。県の職員は挟み撃ちで説得する事が望まれそうです。

多治見市の例です。毎年「植樹祭」が行われ、大量の樹木を伐採し、無見識な樹木を植え、その上偉い人のお手植えを誇示するために、幕標のような物をたてます。ここまででは、おそらく全国等しい事と思われます。

慣例行事として、「植樹祭」について議論を行っておりました。行政独自の私考回路を修正させる事は困難を極めます。まさに不毛な議論でした。無駄な時間を費やし、お互いに不愉快な気分になり建設的な事は全くありませんでした。

4~5年前から作戦を修正しました。日常的に話しかける事にしました。

- ① 樹木を伐採し、そこに樹木を植える事について
- ② シデコブシの自生地周辺に、出身地不明なシデコブシを植栽することについて
- ③ 東濃のハナノキとアメリカ産のハナノキを数メートルしか離れていない所に植える事の意味
- ④ 多治見市に自生していない樹木を山に植える事について
- ⑤ 山に品種改良した樹木を植栽する事について
- ⑥ 外来種の樹木を植える事について。特に、繁殖力の旺盛な樹木を好んで植える事について
- ⑦ その他

耳にタコが出来るほど、細々とした事について話しかけました。その成果として、「公共施設緑化樹木選定基準」を96年8月に策定しました。この基準の遵守を市議会も同意し、国・県にも協力願う事にしました。第一歩ですが、多治見市ですら出来た事です。先進的な地域の皆さんは、当然もっと結構な成果をお持ちの事と思います。

草本の植物についての合意が進んでおりません。特に、キク科は外来種との自然交配が随分進んでいるようです。研究者のご助言を頂戴したいと願っております。

### シデコブシについての結論

東濃地方を中心に発達した小湿地群は、ラムサール条約に云うウエットランドの存在意義そのものだと思います。しかし、それぞれの規模が狭隘故に切捨てられております。その小湿地のほとんどにシデコブシは自生しております。シデコブシの個体だけを大切にしたいと思っておりません。シデコブシが自生している湿地全体を後世に残したいと考えております。学者の一部にありますが、行政はシデコブシを移植し、その個体だけの保護を力説します。肝心な事は、自力繁殖が可能であるか否か、と云う事で、シデコブシの自己生命力を許容しなければならないと思います。

### 自然観察指導員に望まれる事

「自然観察指導員」は、自然保护運動員では無い、と云う議論はその通りかもしれません。自然を観察する市民の皆さんを指導する責務はあると思います。自然を観察するに相応しい場所を確保する事に熱心であるべきだし、忠実でなければならないと考えます。そのような単純明快な事に、わざわざ難しい議論をすることもなかろうと思います。その事に政治性をあえて求める必要性は無いと思います。つまり、自然環境はもともと政治性はないのですから。それに政治性があるとすれば、それは出世指向の心の中にあるだけだと思います。

「海上の森」問題では、通産省・愛知県・瀬戸市は「お上」意識が先行し、言い出した事はその威光にかけ、万難を排し、中央突破しようとしております。「現在の美酒に酔い痴れ、子孫に美酒を残さない」と云うほどの理性も無いように思われます。発想が困難だから、化石化した、19世紀の遺物の万博にす

がって21世紀の開幕に備えようとしております。「自然観察指導員」が大いにサポートジョブを決め込んだ結果、つまる処、通産省・愛知県・瀬戸市の片棒を担いだ事につながりそうです。

自然を観察する絶好な場所を、土木行政の犠牲にさせる事について、大いに議論すべき物と考えます。自然環境は金儲けと立身の対象であってはならないと思います。我々の世代が欲得に加担した結果、東濃地方のシデコブシが代表的な事例ですが、孫たちに自生するシデコブシを見せ、観察させることが不可能となりつつあります。自分は見たし観察もした。美しさに感動もした。しかし、孫にはその体験をさせない。これが果たして大人の考えであって良いのだろうか。大いに自問すべき命題だと思います。政治的中立を装う振りをして、「海上の森」のシデコブシ・オオタカを始め多くの貴重な生き物が殺され、棲家を奪われる事に加担し、自然を観察したいと願う次代の人々の念願を拒絶する事に寄与してはならないと思います。

善意で行っている事の中に、否定すべきことがあります。知っていて、忠告をしない事は、むしろ犯罪的不作為だと思います。自分の子供には注意をし叱ります。行政職にそれが出来ないとは情けない。行政の権力の根源は、市民の中にあるべきだと思います。いきり込むから真実が伝えられなくなると思います。勇気は必要ありません。淡々と、観察事実を提示し、子供に対する慈愛を込めた方策で、権力者のレベルに合わせて説明したいものです。軽い気持ちで自然観察指導員講習会を受講した人が大多数だと思います。自分だけの楽しみを広げる手段として講習会に参加した人も、それはそれで大変結構な事と思います。その楽しみを夫婦で共にし、その趣味の神髄を子供たちにも分け与え戴ければと思います。美しい自然・心地良い自然の中で過ごせる幸せを子孫にも体験させようではありませんか。

(自然観察指導員 NO.8813)

## 事務局から

### 〔行事報告〕

#### ★ 観察研修会

〔期日〕平成9年5月23日～24日

〔場所〕大台ヶ原（奈良県）（出席7名）

例年8月に行っている観察研修会を、今年は大台ヶ原のシャクナゲに合わせて、5月に実施しました。

朝、金山駅を出発して、東名阪から奈良県に入り、吉野川沿いに走って、伯母ヶ峰付近から大台ヶ原のドライブウェイに入りました。途中、柿の葉餌を買って道路端で食べたりして、大台ヶ原の駐車場に昼過ぎに到着しました。

周辺は霧に包まれ、小雨が降っていましたが、ビジャーセンターに少し寄った後、正木ヶ原付近まで3時間ほどかけて往復しました。ウラジロモミやトウヒの原生林と混在している芽吹き後間もない落葉樹は、雨にぬれて美しく、お互いの知識を総動員して観察しました。雨の多い大台ヶ原の自然らしさを満喫できたと（負け惜しみ）言いながら、宿泊地の入波温泉に向かいました。

翌日は、大台ヶ原へ行く計画もありましたが、その日が大台ヶ原祭りで、かなりこむことが予想されたため適当に寄り道しながら、帰ることとしました。初めに、吉野町にある妹山樹叢に行きました。道が山の中には無いため周囲を回っただけでしたが、カシ・シイの林で植物もシダを始め480種あるとのことで、興味を引かれました。次に、吉野山の自然とコウヤマキの純林に寄り、大字陀町の森の旧薬草園を見て、夕方には名古屋へ戻りました。

あいにくの天気でしたが、各地の自然に接することは、自然のいろいろな様相を知り、自然の見方を深めることになると思いました。

#### ★ 普及部会

〔期日〕平成9年6月15日

〔場所〕名古屋市公会堂（出席6名）

〔内容〕

##### (1) 今後の事業の進め方

主に研修会等の内容について検討しました。最近は、研修会に参加する会員が少なくなっていることについて、主な意見では、支部の研修会と内容等で重なっていること、半日の研修では中途半端なみと、あまり出たことの無い人は気後れして出にくいので、電話等で誘うことも必要ではないかなどでした。具体的な研修計画まで充分検討できませんでしたが、今後は研修会の内容を濃くし、時事的な要素も入れるとともに、新人向けのフォローアップ研修なども再開することとしました。

##### (2) 「自然に親しむためのマナー」等

懸案となっていてなかなか進まない、「自然に親しむためのマナー」について内容を検討し、秋位にはまとめることとしました。この次には、「自然観察会テキストの事例集」について秋から取りかかることとしました。

### 〔調査のお願い〕

NACS-Jから「里山の自然調査」の依頼が機関誌とともに会員には送られていると思います。

また、前号でも様式を付けてお願いしました、環境庁の「ツバメの巣調査」も協議会として協力することとなっています。

会員の皆さんのが1カ所でも調査して、該当機関または協議会事務局へお送りいただければ、より充実した結果が得られるはずですのでご協力をお願いします。



## イヌセンブリとノウサギとの共生関係

相地 満(風の会)

## 1 はじめに

イヌセンブリは、我が国に生育する植物種に関するレッドデータブックとなった「我が国における保護上重要な植物種の現状」(1989)において危急種にランクされている植物である。愛知県内における分布の現状も定かではない。



イヌセンブリ  
「牧野新日本植物図鑑」  
から

1996年に愛知県植物誌調査会のまとめた「Save Our Species—愛知県の絶滅危惧植物ー」においても「個体数はわずかである」とされ、要保護種に位置付けられている。知多半島においても過去に記録はあるが、現在確実な生育が確かめられているのは、この風の丘においてのみのようである。

私が最初に、風の丘に抱かれたため池の畔においてイヌセンブリを見たのは、95年10月14日のことであった。まだ、蕾が固い状態であったので、2週間後の10月28日に再度訪れた。そのときの開花株は22本であった。

当初、センブリとの比較観察を企画していたので、その日は、数年前から観察している東海市のセンブリの現状を確認し、調査を終えてから出かけた。東海市のセンブリの開花株は、その1146本であった。しかしセンブリの方は株数が多い割りに花数が少なく、イヌセンブリの方がはるかに多かった。また生育期間のどこかで何物かに食害された跡があり、そのため、株立ちもしっかりとしていた。そして東海市のセンブリよりも花期が少し後にずれているようでもあった。

知多半島における植物についての記載を調べてみると、どの文献もイヌセンブリを越年草としている。風の丘における結実はどう考えても11月半ばになりそうなので冬季の発芽ということがありえるのだろうか疑問に思った。そこで風の丘におけるイヌセンブリの観察課題を、まず1年間の生育史を出来るだけ克明に明らかにする。そして近似種である東海市のセンブリと発芽特性などの比較観察をしてみる。また生育期のある時点における何者かによる食害がイヌセンブリの種子繁殖にどのような影響を与えているのかを明らかにしていくことにした。

普通種とされている東海市のセンブリとの比較観察については、生育地が消滅してしまったので結果を導くことが出来なくなってしまった。が、その他の事柄については、この1年間にかなり興味深い事実を明らかにすることができた。以下に、要約したものを記しておきたい。

## 2 風の丘におけるイヌセンブリの生育史

(表1)は、96年度に観察されたイヌセンブリの生育史を簡潔にまとめたものである。この表からイヌセンブリは種子繁殖をする1年草であることが分かる。

3 食害を与えるのはノウサギであると考えられること

一般に入手できるイヌセンブリに関する文献は、図鑑以外にごく少ない。その中にあって「滅びゆく日本の植物 50 種」（筑地書館 1992 年）にイヌセンブリのやや詳しい解説がある。その中でイヌセンブリがノウサギの食害を受けているらしいことが報告されている。風の丘には、数頭のノウサギが生活しており、6～7 月期にしばしば目撃されている。また、風の

(表1) 風の丘におけるイヌセンブリの生育史(1996年)

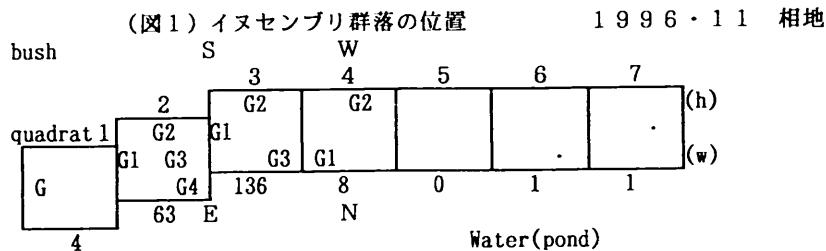
|    |                                                              |
|----|--------------------------------------------------------------|
| 発芽 | 4月の遅い時期に発芽を始める。かなりの高温になってから発芽する。                             |
| 成長 | 6月8日に本葉の出ているものが160本ある。6月29日に最高値18cmになっている。この頃、他の植物の生育が盛んになる。 |
| 開花 | 10月下旬。開花時期はかなり長い。遅く開花したものは結実しない。                             |
| 結実 | 11月に結実する。11月17日に結実株数は213本であった。                               |

丘のイヌセンブリ群落中においてノウサギの糞を採取することができた。喰み跡の様子も、昆虫などによるものではなく小型～中型の草食動物によるものと思われる。実際に喰んでいる現場の確認はできていないが、ほぼ間違いないと思われる。

#### 4 結実株数の調査から分かったこと

イヌセンブリが種子繁殖をする1年草であるとするならば、その経年変化を記録していくう

えで結実株の状態を正確に記録していく必要があると考えた。群落や個体数の変化もここで固定した数が得られると思った。(図1)は、1996年11月17日に調査した際のイヌセンブリ群落の位置を示している。北側にため池の水際があり、南側に水を堰き止めるための堤防に繋がる雑木林がある。コドラーは1m×1mの大きさである。東南側を堰き止めたため池の内側、すなわち土手の北東側にできた緩い斜面にイヌセンブリの群落が位置している。



(表2) イヌセンブリの結実株数

1996・11 相地

| quadrat    | 1   | 2       | 3   | 4       | 5   | 6       | 7   | total  |
|------------|-----|---------|-----|---------|-----|---------|-----|--------|
|            | G1  | G2      | G3  | G4      | G1  | G2      | G3  |        |
| - (1~5a)   | 0   | 0       | 0   | 0       | 4   | 12      | 2   | 0      |
| A (6~15a)  | 2   | 0       | 5   | 14      | 1   | 6       | 9   | 11     |
| B (16~30a) | 2   | 24      | 3   | 13      | 2   | 20      | 46  | 15     |
| C (31~45a) | 0   | 0       | 0   | 1       | 0   | 5       | 5   | 1      |
| + (45~ a)  | 0   | 0       | 0   | 0       | 0   | 0       | 0   | 0      |
| total      | 4   | 63      |     | 136     |     | 8       | 0   | 1      |
| h (a)      | 95  | W70~h80 |     | W70~h80 |     | W50~h80 | 60  | 70     |
| Lx (%)     | 70  |         | 75  |         | 80  |         | 80  | 90     |
| 0~40°      | 35° |         | 35° |         | 45° |         | 45° | 35~45° |
| 40~80°     | 30° |         | 30° |         | 30° |         | 30° | 30°    |
| 80~120°    | 45° |         | 45° |         | 25° |         | 30° | 30°    |
|            |     |         |     |         |     |         |     | 25~45° |

(表2) はイヌセンブリの結実株数を表し、Gはコドラート内の集合を表している。1コドラート内の本数の合計は、totalで示してある。hは、コドラート内の植物生産点の最高位を表し、それが斜面上にあるため、wで水辺側の生産点の高さを、hで土手側の生産点の高さを表している。角度は、水際からの距離を3段階にわけ、それぞれの傾斜角を示している。総合してこの群落は、水際から40cm~120cmの間にあり、7m程の広がりをもつ小群落であることが分かる。コドラート5における本数が0になっているが、ここはごく僅かに人や犬などが歩くために植物の生育が悪く、踏み跡となっているところである。そこでイヌセンブリは踏み付けに弱いことが分かる。6・7は、他の植物生産点が高く、その中における本数は、各1本ずつとなっており、そのため植物間の競争にも弱いことが分かる。が、1本ずつの植物体自体はしっかりしたものとなり、花数も多い。2・3に個体数が集中している。食害を受けるのは、この密生した部分のものである。5の踏み付けが2・3に与える光の影響も無視できない。

(表3) は、1株あたりの結実数の平均を求めたものである。平均的な高さであるBクラスの健全な株を10本、それぞれのコドラートから抽出して求めた。

(表3) 1株あたりの結実数※

| No. | 結実数  | 高さ          |
|-----|------|-------------|
| 1   | 19   | B (16~30cm) |
| 2   | 9    | B "         |
| 3   | 7    | B "         |
| 4   | 5    | B "         |
| 5   | 5    | B "         |
| 6   | 23   | B "         |
| 7   | 7    | B "         |
| 8   | 10   | B "         |
| 9   | 11   | B "         |
| 10  | 15   | B "         |
| 平均  | 11.1 | B (16~30cm) |

※1996.11.17野外において実の数を数えた。まだ未熟のものや花弁を落した直後のものが含まれ、この数がそのまま種子散布する実の数に繋がらない。

(表4) は、12月26日に種子散布を終え、枯死したものを35本採集し、一株ごとにおける開花数と結実数を求め、食害を受けたものとの比較ができるようにしたものである。食害を受けたものの方が、開花・結実数が多くなっていることが分かる。更に食害とは考えられないが、何らかの形で生育期に折損を受けたもの、踏み付けを受けたもの4本の記録を付記した。

このようにしてみると、ノウサギによる食害は、現地点ではイヌセンブリの種子生産力を高めるのに役立っていることが分かる。また、周辺のごく軽い踏み付けや何らかの折損もイヌセンブリ群落の維持により影響を与えていていることがわかる。野生動物や植物、そして人間の営みが微妙に絡み合って成立してきた里山の自然がもつ巧妙な仕組みにいまさらながら驚く次第である。

## 5 おわりに

イヌセンブリとノウサギとの共生関係を考えるうえで、イヌセンブリの生育期間中のどの時点で食害を受けるかが問題である。この2年間では、食害点の高さと開花、結実枝の生育状況から6月~7月期と考えられる。そのころノウサギの活発な活動がしばしば目撃されている。もし食害を受ける時期がそれ以後にずれた場合には、多量の種子生産は不可能になると思われる。何故ノウサギはこの時期にイヌセンブリを喰むのだろうか。興味は尽きない。

かつては全国各地で普通に見受けられたといいうイヌセンブリもノウサギも今では、ごく貴重な里山の生き物になってしまった。それらが細々とした共生関係を保ちながら生きているこの地においてすら、貴重な植物の盗掘や散弾銃による密猟が横行し、パイロット事業による丘の

(表4) イヌセンブリ 1 株あたりの開花数と結実数

1996・12 相地

〈食害を受けていないもの〉

| No | 高さcm | 開花  | 結実  | 軸径mm | 枝数  |
|----|------|-----|-----|------|-----|
| 1  | 11.5 | 1   | 1   | 0.7  | 0   |
| 2  | 35   | 7   | 7   | 1.1  | 0   |
| 3  | 37   | 6   | 5   | 1.4  | 0   |
| 4  | 36   | 9   | 5   | 2.0  | 0   |
| 5  | 40   | 10  | 9   | 1.1  | 0   |
| 6  | 13.7 | 1   | 1   | 0.8  | 0   |
| 7  | 20.2 | 2   | 2   | 0.9  | 0   |
| 8  | 21.5 | 6   | 5   | 1.1  | 0   |
| 9  | 32.7 | 11  | 9   | 1.3  | 0   |
| 10 | 15   | 2   | 2   | 0.9  | 0   |
| 11 | 17   | 2   | 1   | 0.8  | 0   |
| 12 | 20.4 | 4   | 2   | 1.0  | 0   |
| 13 | 14.7 | 4   | 4   | 0.7  | 0   |
| 14 | 26   | 6   | 6   | 1.1  | 0   |
| 15 | 31.4 | 6   | 5   | 1.1  | 0   |
| 16 | 28   | 8   | 7   | 1.5  | 0   |
| 17 | 18   | 5   | 4   | 1.0  | 0   |
| 18 | 21   | 6   | 4   | 1.1  | 0   |
| 19 | 14   | 4   | 3   | 0.8  | 0   |
| 20 | 19.5 | 3   | 3   | 0.7  | 0   |
| 21 | 10.5 | 3   | 3   | 0.8  | 0   |
| 22 | 8.7  | 1   | 1   | 0.7  | 0   |
| 23 | 15.7 | 7   | 6   |      | 0   |
| 24 | 21.3 | 6   | 6   | 1.1  | 4   |
|    | 22.0 | 5.0 | 4.2 | 1.0  | 0.2 |

〈食害を受けているもの〉

| No | 高さcm | 食害点cm | 開花   | 結実  | 軸径mm | 枝数  |
|----|------|-------|------|-----|------|-----|
| 1  | 34.5 | 18.3  | 21   | 3   | 1.9  | 7   |
| 2  | 21   | 9.1   | 12   | 10  | 1.3  | 4   |
| 3  | 26.3 | 20.0  | 11   | 5   | 1.9  | 4   |
| 4  | 24.7 | 24.7  | 27   | 11  | 2.1  | 10  |
| 5  | 23.8 | 23.8  | 14   | 8   | 1.9  | 3   |
| 6  | 23.5 | 22.0  | 14   | 5   | 1.8  | 5   |
| 7  | 32.7 | 32.7  | 46   | 26  | 2.1  | 16  |
| 8  | 27.7 | 24.3  | 12   | 8   | 1.5  | 3   |
| 9  | 39.5 | 26    | 15   | 15  | 1.9  | 3   |
| 10 | 30.4 | 24    | 14   | 5   | 1.9  | 4   |
| 11 | 35.3 | 26.6  | 11   | 7   | 1.3  | 4   |
|    | 29.0 | 22.9  | 17.9 | 9.4 | 1.8  | 5.7 |

〈折損のあるもの〉

| No | 高さcm | 折損点cm | 開花   | 結実  | 軸径mm | 枝数  |
|----|------|-------|------|-----|------|-----|
| 1  | 15.7 | 15    | 1    | 0   | 0.7  | 0   |
| 2  | 32.5 | 30.5  | 21   | 13  | 1.7  | 6   |
| 3  | 25.5 | 24    | 17   | 10  | 1.6  | 0   |
|    | 24.6 | 23.2  | 13.0 | 7.7 | 1.3  | 2.0 |

〈踏付のあるもの〉

| No | 高さcm | 踏付点cm | 開花 | 結実 | 軸径mm | 枝数 |
|----|------|-------|----|----|------|----|
| 1  | 34   | 1.1   | 9  | 7  | 1.0  | 2  |

開削が急速な勢いで進行している。

現在、愛知県では、里山の自然を守るために現存表土の保全までをも含めた環境基本計画の策定が行われている。案を見る限り、それは国内において最も進んだ施策の一つとなつていくであろう。しかし、その実行を前にしてこの2年間に見受けられた「風の丘」におけるノウサギとイヌセンブリとの共生関係は、確実に断たれていくであろう。貴重種を保全するために

は、その生育を可能にする生物どうしの関係の保全なくしては有り得ないからである。



ノウサギ

「新編日本動物図鑑」「アニマルウォッチング」  
から

ノウサギの糞

## ダイオキシンについて

近藤盛英(名古屋支部)

最近、新聞紙上等でごみ焼却施設の排ガス中のダイオキシンが話題となっています。この地方では、名古屋市の鳴海工場から、緊急対策が必要とされる判断基準である1m<sup>3</sup>あたり80ナノグラムを超える110ナノグラムが測定されました。（ナノグラムは10億分の1グラム）

### 【ダイオキシン類の毒性】

ダイオキシン類は多くの異性体をもつポリ塩化ジベンゾパラジオキシン（PCDD）及びポリ塩化ジベンゾフラン（PCDF）の総称で、主として有機塩素化合物の合成過程、焼却過程など非意図的に発生すると考えられている化学物質です。

ダイオキシン類の我が国の発生源としては、  
都市ごみ焼却が最大のものと言われており、約  
8割を占めるとされています。

ダイオキシン類は、環境中に残留し続け、動物実験では、強い毒性を有すると報告されています。ダイオキシン類の中では2,3,7,8-テトラクロロジベンゾパラジオキシン(TCDD)が最も毒性が強いと言われています。ダイオキシン類の毒性としては、動物実験の結果から、急性毒性、慢性毒性、発がん性、生殖毒性、催奇

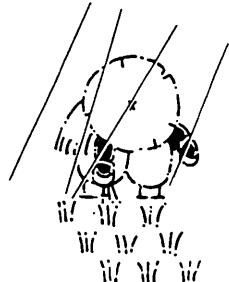
## 【我が国のダイオキシン類の暴露状況】

## ○暴露状況の推定結果

| 暴露状況の事例                 | 暴露の推定値                |
|-------------------------|-----------------------|
| (1) 一般的な生活環境からの暴露状況     | 0.3~3.5pg/kg体重/日      |
| (2) 一般的な生活環境から偏りのある暴露状況 | #5pg/kg体重/日           |
| ①魚からの摂取量が大きい場合の想定       | 3.6(1.9~5.3)pg/kg体重/日 |
| ②ごみ焼却施設の周辺の想定           | 1.8~5.1pg/kg体重/日      |

暴露評価に必要な一般環境、食物等に含まれるダイオキシン類のデータは必ずしも十分ではない中の推定であり、今後のデータの蓄積が必要と言われています。

形性、免疫毒性等多岐にわたって報告されています。人への影響については、必ずしも十分なデータが得られていませんが、がん発生との関係は無視できないとされています。



## 【ダイオキシン類の健康リスク評価指針値】

ダイオキシン類の人への暴露が環境汚染に起因するものであり、健康影響の未然防止のためには環境汚染の低減が必要との判断から、環境保全対策を講ずるにあたっての目安となるようダイオキシン類の健康リスク評価指針値が、人の一における体重(kg)あたりのダイオキシン類の摂取量として、5 pg/kg<sup>体重</sup>/日 (pg: ピコグラム 1兆分の1グラム)と設定されました。

なお、この値は、人の健康を維持するための許容限度としてではなく、より積極的に維持されることが望ましい水準としての人の暴露量を評価するために用いる値とされています。

### 【リスク評価について】

#### (1) 我が国における一般的な生活環境での暴露の状況を想定した場合

暴露量の推定値が健康リスク評価指針値を下回っていることから、現時点での人の健康に影響を及ぼしている可能性は小さいと考えられていますが、現在の暴露レベルは健康リスク評価指針値に比べて十分低いとは言えない状況にあるので、長期的に高い安全性を確保する観点から、今後、ダイオキシン類の環境中の濃度の低減を図ることが望ましいと考えられています。

#### (2) 一般的な生活環境での平均的な暴露に比べて特に高い暴露を受ける条件を想定した場合

暴露量の推定値が健康リスク評価指針値と同程度以上となることがありますから、今後、健康リスクを小さくする観点から、ダイオキシン類の環境中濃度の低減を図る必要があると考えられています。

### 【対策の概要】

ダイオキシン類は、ごみ焼却施設において、不完全燃焼によって生成するほか、排ガス温度が300℃前後のときに排ガス処理装置において生成することが知られています。

このため、例えば鳴海工場では、応急措置として、焼却炉内に安定してごみを供給することにより、安定燃焼を図りダイオキシン類の発生を抑制する目的で、従来間欠で焼却炉内にごみを供給していたものを連続して供給できるように改修を行いました。また、完全燃焼を促進させるために、焼却炉内に2次燃焼空気を吹き込むための仮設のプロアを設置しました。これらの対策は平成8年度中に実施され、排ガス中のダイオキシン類の濃度は64ナノグラムまで下がりましたが、さらに、仮設のプロアから二次空気吹き込み装置に替え、また、電気集じん器の入口に冷却空気を吹き込み、排ガス温度を下げることにより、電気集じん器内の再発生を抑制するという対策を実施することにしています。

### 【今後の対策について】

今年1月にとりまとめられた「ごみ処理に係るダイオキシン類発生防止等ガイドライン（新ガイドライン）」に基づき、ごみ処理に係るダイオキシン類の削減対策を行うことは当然必要ですが、ダイオキシン問題は単にダイオキシン対策だけでなく、さらに違った課題も含んでいます。

ごみは燃やすことで体積を減らすことができますし、生ごみは腐敗を防ぐこともできます。焼却することで狭い土地でも埋めることができます。しかし、燃やして埋めるという我が国におけるごみ処理の基本が、ダイオキシン問題の背景となっているわけです。

ダイオキシン削減対策を実施していくためには、ごみの排出抑制を図り、リサイクルを徹底し、焼却量を極力削減していくことも必要と思われます。

### ホオノキ (モクレン科)

太田順造 (名古屋支部)

万葉の頃ホオノキの葉を酒の杯とする習わしはすでにあり、食物をこの葉に盛る風習は今でも農山村の祭りの行事に残っており、地方によっては田植の弁当をホオノキの葉に包む習わしが現に生きている。

万葉時代にはこの葉に食物を盛る事が当然の習わしとして行われホホガシワの別名はこの事によって付いた。

古文書に「古き時には凡飲食の物を盛る葉をもてし、其葉を呼でカシワと言ひけり」とあるように食物を盛ったり、覆ったりするに適した広い葉をカシハと称した。

カシハの語源はカシキハ (炊葉) によるとか、あるいはカタシハ (堅葉) などが転じたものと云われている。

## 会員紹介

5月は若葉の森の中を乱れ咲くつつじの花を見ながら歩き、少し遠い、おおさんしょううおの棲む蛇が洞川まで行きました。昼間だからおおさんしょううおを見ることはできませんでしたが、少し濁って、点在する大きな石の間をゆっくりと流れる川を見ていると、その辺りにおおさんしょううおがいるように思えます。岸で弁当を食べながら、この川が改修工事でコンクリートでかためられたら、おおさんしょううおはどうなるのだろうと話し合いました。

定光寺公園は広く、地形の変化に富み、多彩な植物、動物に恵まれています。季節に合わせてコースを選びますが、常に新しい発見があり、感激があります。より楽しい観察をこころがけています。

参加をお願いします。

毎月第2土曜日午前9時30分～午後2時  
定光寺山門前駐車場集合

## カモシカのこと

村上和彦（奥三河支部）

自宅から南アルプスの3千m以上の峰を、全て一望することができ、中央アルプスも左に見える。海拔820のここは、「ニホンカモシカ」と「いのしし」が私の研究対象である。



「カモシカ」は毎年下條村で環境庁より5頭の固体調整依頼がきて、獣友会で倒す。

私も自然保護活動をしながら、会員として個

体調整に協力している。

「カモシカ」は偶蹄芽だから牛だ。胃は4つあって、その内1番目の胃を開いて見ると、中は「松の芽」が95%、「ささ」が5%で、林業家が見れば殺したくなることが、少しは理解できる。しかし、何とかならないものか。いつもこのことが頭の中にある、銃を「カモシカに向けても、タイミングを逃がしてしまうことが多い。

一昨年の3月下旬、個体調整期限まで数日とせまり、最後の1頭がなかなか捕れなくて獵友会員はイライラしていた日、とうとう私が待っている所に「カモシカ」が犬に追われて現れてしまつた。

どうしても撃たなくてはならない。これをはずしたら、何と言われるかわからない。私は心中で何かに向かって謝った。そして撃った。

次の瞬間、目の前が真っ白になって、私の耳から音が消えた。しばらくして、私は獣友に「倒した」と伝えると又目の前がモノクロの世界になった。いつまでも私は銃を強く握っていた。

猶友が「これ子どもがいる」という言葉に、現実にもどり、駆け寄って見ると、猶友が腹を開き、ふくらんだ子袋をなでながら「ほらヒズメが見える」とつまんだ。確かに小さいがはっきり二つに割れた爪が見える。「2頭殺してしまった」山が風が出たのかざわざわとやかましく騒ぎ立てる。何か私を責めているように感じた。

「カモシカ」は撃った人は原則としてその後は「カモシカ」にあまり触らせないように他の獵友がやる。全ての計量がすむと、皮をはぎ、頭がい骨と性器は研究所に送られ、皮は刻印を打たれてなめし業者へゆく。全ての仕事が終わると、ごくろうさん会をやる。今年の個体調整を無事終わったのでみんな安堵の顔をしているが、私は頭がもやもやしていた。

## 会員紹介

### 写真展のこと

近藤 守（西三河支部）

自然観察指導員が、どのような事をするのかよく分からず応募して、運よく抽選に当り、静岡県で講習を受けて、もう3年目になります。観察会に出席して勉強を、などと考えてはいるのですが、それもできずに、今日に至りました。

しかし、なにかをしなくてはと思い、考えついた事が写真展です。さいわい数年前から、奥三河の山を歩きながら撮った写真が多数あったので、自分でも一番気に入っている面の木峰周辺のもの40点ほどを選んで、“面の木峰の四季”と題した写真展を、昨年の11月に幸田町の町立図書館で開く事ができました。

友人の助けを受けての手作りでしたが、御来場下さった方の中には、「是非一度行ってみたい、道順を教えて。」とか「昔行った事があるが、このような自然があるとは知らなかった、写真を見てよかったです、今度はじっくりと見てきます。」また、「ブナの花はいつごろ咲くのか。」といったような質問もあり、どのような形にしろ、自然に興味を持っている人は結構多いんだ、と感じたものです。

困ったことは、写真や实物を持ってきて、この花の名は、などと尋ねられたことです。予想もしなかったことなので面食らいましたが、なんとか全問正解でホッとしたものです。

わずか5日間、駄作を並べただけの写真展でしたが、御来場下さった中の何人かには、自然の素晴らしさが伝わったのではと思っています。

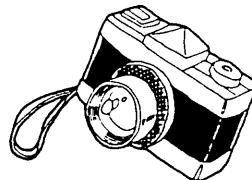
今年は、作手村の“長の山湿原”の自然を紹介しようと準備中です。

来年は、地元幸田周辺の自然をまとめることができたらと考えています。

皆様の指導をお待ちしています。

### 写真展－自然観察会の記録－

“長の山湿原の花たち”開催のご案内



場所：幸田町立図書館展示室

日時：1997年7月8日 PM1:00~5:00

7月9日～7月12日 AM10:00~PM5:00

7月13日 AM10:00~PM3:00

### 定光寺観察会

入谷精一（尾張支部）

定光寺を包む森はうっそうと茂る椎の森です。外から見るともくもくと盛り上るように茂る椎の葉が陽光に照らされてキラキラと輝いています。森の中に入ると暗くて、落葉が沢山積っています。斜面を歩いていると落葉と一緒に滑って転んだりします。よく見ると落葉の中にカンアオイが咲いていたり、時には白いユウレいそうを見ることができます。森の中は静かで落葉を踏む音だけが響きます。

公園の正伝池をはさんだ向い側の山は落葉樹の森です。初夏の若葉がみごとです。特に落葉樹の中にところどころに立っている杉の暗いみどりと、若葉の明るいみどりが対象的に大変美しく見られます。

冬から春にかけての観察会は正伝池に流れ込む小川に沿った日当たりの良いコースをとります。田圃の中を流れる小川は清く澄んでせせらぎの音が聞かれます。流れをのぞくとセリやクレソンが生えています。春になると小魚の群れ泳ぐ姿が流れの中に見られます。その頃になると小川の両岸はタンポポの黄色いジュータンになります。

## 内 容

### ☆研究会（自然観察指導方法について）「街の中の自然観察①」（都市公園をチェックする）

期日：平成9年7月12日（土） 13:30～16:30（雨天実施）

場所：鶴舞公園（名古屋市公会堂前集合）

※自然の少ない街の中でどんな自然観察ができるか考えてみましょう。

### ☆基礎研修会「クモの生態を知ろう」

期日：平成9年8月24日（日）

場所：未定

### ☆基礎研修会「草原の昆虫と鳴く虫」

期日：平成9年9月15日（月・休）

場所：未定

### ☆研究会「街の中の自然観察②」（都市河川）

期日：平成9年9月23日（火・休）

場所：山崎川

### ☆基礎研修会「キノコに強くなろう」

期日：平成9年10月25日（土）

場所：未定

### ☆話題の地見学会「渥美半島の道路計画」（予定）

期日：平成9年11月3日（月・休）

### ☆指導員研修会 未定

期日：平成9年11月23～24日

場所：県外の予定

★問合せ先：いづれも佐藤（☎05617-3-5674）まで

### ※「自然なにかとアンケート」

第3回の自然に関するアンケートを行います。今回のテーマは『自然との共生』です。あなたは自然との共生と聞いて何を感じますか。自然と共生するとはどういうことでしょうか。どうすれば自然と共生できるのでしょうか。あなたの考えをお聞かせください。締切りは7月20日、宛先は編集部（近藤）までお願いします。

### ※編集後記

毎年、暖かくなりだとハチの苦情が保健所に寄せられます。



スズメバチの苦情もありますが、ミツバチやアシナガバチの苦情も多くあります。名古屋市の天白区はそれだけ自然が多いということなのでしょうが、都市の中に自然を求める声とハチは嫌だという声が共存しています。自然との共生は、自然を選択する権利も含まれるのでしょうか。皆様の原稿をお待ちしています。（近藤）

## 目 次

|                  |    |
|------------------|----|
| 東濃地方のシデコブシ       | 1  |
| 事務局から            | 10 |
| イヌセンブリとノウサギの共生関係 | 11 |
| ダイオキシンについて       | 15 |
| ホオノキ             | 16 |
| 会員紹介             | 17 |

近藤守、入谷精一、村上和彦

愛知県自然観察指導員連絡協議会 機関誌 NO.63

編集事務局 ☎470-11 豊明市西川町笠原1-9 近藤盛英